

高齢者が思い出を語らない、語れないことの意味

—非構造的ライフレビュー面接5回法の事例より—

○林 智 一

(香川大学医学部)

目 的

Butler(1963)は、終末期の患者や高齢者など、死を意識した人に見られる人生の回顧にセラピューティックな意義を見出し、それをライフレビューと名付けた。ライフレビューが適応的に進展した場合、高齢期に優勢となる心理社会的危機である「自我の統合性 対 絶望」(Erikson, 1963)の解決に向かうという。

筆者は、ライフレビューの展開プロセスの解明と技法論構築のため、心理的に健康な高齢者に対して研究としてのライフレビュー面接を行ってきた(林, 2012; 2016; 2018 など)。その結果、主訴を持たない、心理的に健康な高齢者も潜在的には人生上の葛藤や問題を有しており、ライフレビューの進展に伴い、それらが解決に向かうことを明らかにした(林, 2012)。

しかし、研究協力者の中には、特定の思い出について選択的に回顧が生じない高齢者もあった。本研究では、思い出を語らない、あるいは語れないことの意味について、一事例をもとに検討した。

方 法

某介護老人保健施設より認知症やうつ病の診断がなく、ある程度の言語化能力を有する、疎通性良好な入所高齢者を紹介してもらい、研究の趣旨を文書と口頭で説明のうえ、承諾の得られた高齢者を研究協力者とした。週1回50分の対面法による非構造的ライフレビュー(質問項目をあらかじめ設定しない面接)を5回実施し、その後、振り返り面接を行った。

結 果

90歳の男性、Aさんとの面接経過である。語り手の言葉を「」、聴き手である筆者の言葉を<>で示す。

#1 幹部候補生として海軍に入隊。退役の時には薬や食料を袋いっぱいもらい、向こう6ヶ月の給料もくれた。「家内」が入所の手配をしてくれた。だが、「家内」も死亡。子どもは小さい頃に病死。

#2 B29が編隊を組んで来るが、高射砲の弾幕の上を飛ぶ。それを見て、日本は負けると思った。戦後、「駐在さん」から警察の仕事を紹介され、経理の仕事に就いた。その後、「一般行政」を希望して、業者の監督をする立場になった。<結婚は？>

>。「飯炊き女がいた」。家事をしてもらっていた。

#3 海軍を志望したのは、服装に惚れたから。警察の経理では、「担当官」の不正の尻拭いで訂正印を押さないといけなかった。<損な役回り>。

#4 60歳で退職したが、軍の恩給もあったし、800坪の土地もあるし、もうお金は儲けなくても良いか、と思うように。「飯炊き女」が家事。34, 5歳の女性で、施設入所もその人が契約してくれた。退職後は、マージャンをしたり、大金で船を出して「太平洋の真ん中」で釣りをしたり。

#5 海軍は、船の倉庫にいっぱい、見たこともないような外国のお菓子を買い込んで、天長節にくれた。「恩給もあり、もう使い切らん(笑)」。「愉快的な人生。愉快地にやれるように努力はしてきたけど」。

振り返り面接 <話しにくかったことは？>。

「ない」。<人生は百点満点で何点？>。「7, 80点」。子どもがいなのが減点。風邪をひかせて殺したようなもの。「家内」も死んだ。ガンで、役所に勤務していた時に亡くなった。

考 察

詳細な話しぶりに比して、結婚の話題は不明な点が多かった。「家内」と「飯炊き女」が混同されている場面もあった。人生の減点部分として、子どもや妻との死別があらためて語られたが、結婚生活の詳細は結局、語られないままであった。子どもの病死や妻との死別は、Aさんにとっては受け入れがたい辛い思い出であり、そこに触れないことで心理的安定を保っていたように推察された。

受け入れがたいと思われる要素を否定することによって、全体としては満足の行くライフサイクルであったという見方を構築する過程を疑似統合(Erikson, Erikson, & Kivnick, 1986)と呼ぶ。疑似統合であっても、現在の安定を揺さぶるような介入には慎重であるべきだと筆者は考える。回数に限られた研究としての面接では、語り手の自我強度の査定や、自発性、主体性の尊重が重要である。

【科研費基盤研究(C)17K04424『高齢者のライフレビューが生起するとき—奏功機序の解明と技法論の構築に向けて—』(研究代表: 林 智 一)による】